



名も無き街へ

飯澤 元哉 (いいざわ もとや)
千葉大学 工学部 建築学科

JIA全国出品作品

名も無き街へ



僕は日本に無い何かを求めてモロッコを旅をした。サハラ砂漠に向かう道中、アトラス山脈の麓に新しい街が建設されていた。電柱と配電盤だけが無機質に並ぶ墓地のような光景で、そこから連想される街の未来の姿はいつしかの日本であり今日の中国と何ら変わりなかった。そんな代わり映えのしない陳腐な光景を生み出しているモロッコ人は不思議なくらい自国の近代化に目を輝かせて自慢してくるのだ。

本提案はモロッコ人が見落としてきた彼らのアイデンティティ、これを一介の旅行者であった日本人が再評価し、神学校としてこの土地の始まりの建築に還元する。暮らすことの豊かさと彼ららしさを共存させた先に喜びがあるように。

講評

石膏を型抜きしたレリーフの数々は、景観のスケッチを元に、重層する影の作り方をスタディしたものだそうである。レリーフには様々な色が施されており、そこには既に白い建築を指向していないことが見受けられる。設計作品には全体に2種類の色を大胆に用いており、赤はモロッコの現地で使われている色、青は民族を象徴する色とのことである。このヴィヴィッドな色使いはルイス・バラガンがメキシコにおいて鮮やかな色彩を建築に用いていたことを想起させる。この作品で使われている青は、砂漠のなかのオアシスのような水の色にもたとえているのかもしれない。

プランは無理の無いスケールで計画されており、空間の配列分割が美しく、シンプルで力強い。重厚な壁厚が際立ち、外観はきわめて開口部が少なくおさえられ、それ故に内部の所々にあらわれる、上空からの光がもたらす陰影は強烈であろう。作者の言うモロッコの「影の文化」は、卓越した光と影の空間をもたらしている。理性的なプランと色彩や素材、風土へのこだわりにより、rationalでありながら emotional な空間を創出しているといえるのではなかろうか。

(審査委員：佐久間 達也)

